講評：斉藤祐介「二種類の生産論への再評価 — フェミニズム視座からのマルクス経済学 —」

小幡道昭

2007 年 2 月 28 日

1. エンゲルスが『起源』「序文」で、二種類の生産論、すなわち、生活物資を直接・間接に生産する「社会的生産」と、生命を再生産する「私的生産」とを、唯物論による歴史把握の基礎としてしたことにこだわり、これを基底に据えている点は、その内容の賛否はともかく、論文に一貫性を与えている。ただ**第 I 章**でも、「生命の再生産」「種の繁殖」「私的生産」といった基本概念は、なお、筆者によって充分に深められているとはいえない面がある。エンゲルス自身のテキストをもう少し丹念に直接分析し、解釈を試みたほうがよい。そのうえで、できれば、筆者自身がその核心を掘りさげ、再構成できれば、最後に結論のところで、「私的生産を（「の」か？）核心に捉える理論的概念がマルクス経済学に欠落していたため」(34 頁) だという場合にも、単なる要望で終わることなく、いかなる意味で私的労働を社会的労働とを「相互関係」において理解できるのか、その内容が明らかになるのではないか。

2. **第 I 章（2）**「二種類の生産論を巡る論争」の部分は、論争の紹介、それに対する批判ともに比較的よくまとまっていた。

3. **第 II 章**「マルクス主義と私的生産論」は、基本的には経済学が、労働力の再生産として、唯一人口論という観点からしか、人間の再生産を扱ってこなかった限界の指摘が中心問題であるとよめた。この人口論的な観点さえも、古典派とマルクスとでは、ともに人口論といいながら、取扱方は根本的に違う。人口は生活物資の多寡に影響され、広い意味で生産されるという人口論を古典派がもっていたのに対して、マルクスの場合には、資本が蓄積を通じて相対的過剰人口を自ら創出できるというかたちで、資本主義の発展にとって自然人口の制約はないとし、むしろ、この過剰人口の処理、つまり失業に資本主義は困難を抱えるという主張になっている。スミスとマルクスを扱っている、**第 II 章の（1）と（2）**の関連は以上の点が基本だと思うが、そう読みとりにくい点があった。

4. このような流れをふまえて、宇野弘蔵や大河内一男など２０世紀のマルクス経済学者たちが、この人口問題をどのように処理してきたのか、**第 II 章の（3）**では、もう一歩ふみこんで検討する必要がある。そこで基本的に問題になったのは、労働力に関しては市場的な処理だけではすまない要因が存在し、それを国家や制度や慣習といった、非市場的な要素で対処せざるをえない、現実の資本主義をどう捉えるのかという点だった。この章の結論として、大河内理論に最終的に意義を見いだすかたちになっているが、ただ「経済学が労働力の保全の問題を扱わなければならない必然を示したとして評価」するだけでは、ややもの足りない。やはり、「労働者の再生産」にとって、非市場的な要素がどうして不可欠となるのか、分析してほしい。過剰人口の温存（失業対策）なのか、貧困化による労働人口の減少（社会政策）なのか、家族・地域社会の解体による社会秩序の瓦解なのか、等々。

5. **第 III 章の（1）**「フェミニズム理論の成立」は、やや概説的・紹介的なものにとどまっているが、この問題はもっと思想史的に深めることができれば興味深い。近代啓蒙思想とフェミニズムとの関連は、今日に至るさまざまな自由を要求する運動の連続（発展性）と切断（革命性）の一般的な問題につながる。リベラリズムというかたちで「近代人権思想」が確立されると、それによって、さまざまな自由平等の領域・対象の拡張運動が誘発された。この流れにフェミニズムも乗るものなのか、という点である。２０世紀のマルクス主義は、このようなリベラリズムを乗りこえたと自負してきたのだが、この点が今日、問い返されているので、マルクス主義とフェミニズムの関係を捉える枠組として、広義のリベラリズムとソーシャリズム、ソーシャリズムのなかにおける２０世紀マルクス主義の位置など、思想史的に捉えかえしてみるとおもしろ問題になると思う。

6. フェミニズムの多様化を論じた**第 III 章の（2）**は、マルクス主義とフェミニズムの関係を整理するという意味では必要だったのかもしれないが、やや外面的な歴史の記述に終わっている。論文筆者自身の立場が必ずしも明確にされていないためかもしれないが、「近代的人間概念そのものに性的偏向が内在している」（28 頁）というラディカル・フェミニズムの主張に同意するのかしないのか、この点が明確ではない。「二種類の生産論」を高く評価し、とくに「私的労働」の相対的な独立性を主張する本論文の立場は、ラディカル・フェミニズムと基本的に同じ立場に立つのか、あるいは、歴史的な観点を重視するようにもみえる本論文のアプローチは、歴史的な説明に還元されることを拒み、男女間の個人的・心理的な側面に女性抑圧の基本原理を捉えるべきだというラディカル・フェミニズムとは相容れないのか、この点が明確でないように思う。

7. **（3）**もやや紹介的で、「二種類の生産論の今日的意義」がけっきょくどこにあるのかが、示されているとはいない。家族論とか、労働組織論とか、価値論とか、どれか一つが重要だというようにとる必要はないが、とりあえず、どこかに焦点を絞って、「二種類の生産論」にたつことで、原理論なり段階論の内容がどう変わるのか、例解すると「今日的意義」がわかると思う。

8. **全体として**、「二つの生産論」とフェミニズム史を軸に、いくつか関連する研究・論争を整理することで問題の射程がかなり広いことを感じさせるが、逆に、この論文が独自に明らかにした論点がなにか、焦点がやや不明で、いままで正面から扱われてこなかった「私的労働」が、実は経済学においても、あるいは広く社会科学一般においても注目すべきだという必要性論にとどまっている憾みがある。簡単にその今日的意義の内容を答えることはむずかしいと思うが、今後に期待したい。